

滋賀県立琵琶湖文化館所蔵「源氏物語画帖」の紹介

岩 坪 健

一 書誌

滋賀県立琵琶湖文化館に所蔵されている「源氏物語画帖」（以下、本画帖と称す）は、詞書を記した色紙と絵を描いた色紙が十二枚ずつ現存して画帖に仕立てられている。詞書の料紙も絵の色紙も鳥の子紙で共に保存状態は良好であり、前者は一面に金微塵箔を撒き散らし金泥にて草花や鳥を描き、後者は彩色され全図に金雲を配する。注目すべき点は絵の法量が伝来する源氏色紙絵の中でもかなり大きいサイズであること、そして詞書との大きさが異なることである。画帖の寸法は縦三七・四×横三〇・三センチ、詞書は縦一八・一×横一八・二センチ、絵は縦三二・五×横二六・六センチで、比較すると詞書の縦の長さは絵の半分ほど、横は約七割しかない。本画帖のように見開きの右側に詞書、左側に絵が台紙に貼られている場合、通常

は両方とも同じ大きさである。詞書はすべて和歌一首のみで一人物の手になり、書風から判断すると江戸時代中期の写しで、絵の制作年代も同じ頃と推測されると江戸時代中期の写しはすべて対になるので、別々の作品から取り合わせた可能性よりも、当初からセットであった確率の方が高く、絵と詞書のサイズが違う珍しい作例になる。類例として、十七世紀に制作された伝土佐光則筆「白描源氏物語色紙貼付屏風」（佐野みどり氏『源氏絵集成』所収、藝華書院、二〇一一年一月）が挙げられる。絵と詞書の色紙が五十四組貼られた六曲一双の屏風で、法量は絵が各々縦一三・四センチ、横一四・二センチ、詞が各々縦一六・七センチ、横一四・〇センチである。横の長さはほぼ同じであるのに対して、縦は詞の方が三・三センチ長い。各組とも詞の色紙が絵の上に配置されているのは、文字だけ書かれた色紙よりも絵の色紙の方が重厚に感じられるので絵を下に置き、さらに詞の色紙を絵より少し長くして、絵とのバランス

スが取れるように工夫したかと想像される。それに対して本画帖の絵と詞の大きさの比率はかなり違い、これに關しては今後の研究に俟ちたい。

二 翻刻と解説

現在の本画帖では絵も詞書の色紙も巻の順に貼られていないが、詞書の和歌がある巻を物語の進行順に配列すると以下のようになる。

1 桐壺⁽¹⁾、2 帚木、3 空蟬、6 末摘花、7 紅葉賀、8 花宴、11 花散里、12 須磨、15 蓬生、18 松風、19 薄雲、49 宿木。

連続する巻々だけが残っているのであれば、五十四帖揃った画帖の一部と想定されるが、49 宿木のように一帖だけ他とは離れた巻もあるので、これらの巻々が現存する経緯は推測しかねる。絵には巻名が記されず、例えば最初の見開きを見ると、詞書は花散里の巻で絵は桐壺の巻というように対応しないが、私に調べたところ和歌と絵はすべて対になると判断して、末尾に全図を巻別に並び替えて掲載した。

そこで以下、巻の順に詞書を「」内に翻刻し、その本文が掲載されている新編日本古典文学全集の冊数と頁数を書く。例えば(①二九頁)は第一冊の二九ページを示す。次に絵の場面

を記してから、似た図などを指摘する。なお詞書と絵では場面が違うことが多いので、詞書の説明は省く。また、秋山虔氏・田口榮一氏監修『豪華「源氏絵」の世界 源氏物語』(学習研究社、一九八八年)は『豪華』と略称する。

1 桐壺。「宮城野の露ふきむすふかせのをとこはきかもとを思こそやれ」(①二九頁)。七歳の源氏を右大弁が鴻臚館に連れて行き、来朝した高麗の相人に占わせたところ(①三九頁)。三人の位置を結ぶと三角形になり、最も身分が高い源氏が△の頂点に位置する、という安定した構図をとる図が多い。それに対して本図は細長い三角形になり、相人と右大弁が見つめ合い、その様子を御供の少年が窺っている。それに似た図様は、「白描源氏物語团扇貼付屏風」(十七世紀前半、高津古文化会館蔵)や明暦三(一六五七)年版『源氏小鏡』(上方版大本)に見られる。また、全体の構図が似るのは伝土佐光則筆「源氏物語色紙貼付屏風」(江戸時代初期、個人蔵)⁽²⁾で、両図とも右大弁の下襲の裾は階にまではみ出して翻っている。近世の源氏絵は婚礼調度として誂えられたので、作風は静穏なものが多く、このように裾が乱れて屋外にまで広がるような動的な描写は珍しい。

2 帚木。「こからしにふきあはすめる笛のねをひきと、むへきことのはそなき」(①七九頁)。ある殿上人が木枯らしの女と

合奏したところ(①七八頁)。土塀は物語本文の「荒れたる崩れ」(同頁)に即して描かれているが、「庭の紅葉」(①七九頁)はない。また、「この男いたくすすろきて、門近き廊の簀子だつものに尻かけて」(①七八頁)の本文により、縁側に腰かけている図が多い。本図のように地面に立っている図を探すと、土佐一得筆「源氏物語色紙貼交屏風」(十六世紀末、東京国立博物館蔵)、住吉如慶筆「源氏物語手鑑」(個人蔵)³、「源氏物語歌絵帖」(江戸時代前期、チェスター・ビーター・ライブラリ蔵)⁴、伝住吉如慶筆「源氏物語扇面画帖」(十七世紀、九曜文庫蔵)が挙げられる。この四作品のうち前の二作には紅葉が描かれ、後の二作には紅葉はない。⁵

3 空蟬。「空蟬の身をかへてけるこのもとに猶人からのなつかしき哉」(①二二九頁)。小君の手引きで紀伊守邸を訪れた源氏が、目当ての空蟬が軒端萩と碁を打つ様子を垣間見たところ(①二一九頁)。源氏が葦越しに覗き、手前にいる空蟬は後ろ姿しか見えず、小君が二人の女性の真ん中に座るといふ構図は、既に土佐光信筆「源氏物語画帖」(二五〇九年、ハーバード大学美術館蔵)において確立している。光信筆の小君は背を向けていて、その描き方が後世に継承された。本図のように斜め前を向く図様は珍しく、「源氏物語扇面散屏風」(十五世紀末〜十六世紀初、浄土寺蔵)、狩野氏信筆「源氏物語図屏風」(十七世

紀、個人蔵)、「白描源氏物語絵巻貼交屏風」(十六世紀、個人蔵)と「源氏物語絵貼交屏風」(昭和女子大学図書館蔵)⁶に見られる。

6 末摘花。「なつかしきいろともなしになに、このすゑつむ花を袖にふれけむ」(①三〇〇頁)。源氏が末摘花の奏でる琴を聞き終わり帰ろうとすると、後をつけてきた頭中将に声を掛けられたところ(①二七一頁)。物語には「梅の香」(①二六八頁)と記すだけだが、「源氏物語絵詞」に「庭に紅梅有」と記されたように紅梅の図が多く、本図も紅梅の背後に松を置く。その構図は、「画面左上、寝殿の御簾奥に琴を弾く姫君、右下方、こわれかけた透垣のかげに二人の男を描き、満開の紅梅と松を配する図様は、古くは藤岡家扇面にも見られ、土佐派を中心にこの帖の代表的場面として定型化された。」(『豪華』)と解説された伝土佐光則筆「源氏物語色紙貼付屏風」(個人蔵)。1 桐壺にも掲出)と共通する。

7 紅葉賀。「いかさまにむかし結へるちきりにて此世にかゝる中のへたてそ」(①三二七頁)。夕立の後、源氏が温明殿のあたりを歩いていると、源典侍が得意の琵琶を演奏しているところ(①三三九頁)。この構図は、「土佐光起の印が色紙裏に押されており、光起の小画面源氏絵として、これまで未紹介の注目すべき作品である。」と『豪華』で評された光起筆「源氏物語

「画帖」(一六五八年、個人蔵)と同じである。また人物の配置や建物の構図は、「石山寺蔵 四百画面 源氏物語画帖」(江戸時代中期)と共通する。

8 花宴。「ふかき世のあはれをしるも入月のおほろけならぬちきりとそ思ふ」(①三五六頁)。桜花の宴の後、源氏が弘徽殿の細殿で朧月夜の方と出会うところ(①三五六頁)。物語では朧月夜が源氏の方に来る(「こなたさまには来る」①三五六頁)が、絵では本図のように源氏の目の前を朧月夜が通り過ぎようとしている作例が多い。本図と同じ構図は夙に、土佐光吉画・後陽成天皇他書「源氏物語画帖」(桃山時代、京都国立博物館蔵)に見られる。

11 花散里。「橋のかをなつかしみほと、きすはなちるさとをたつねてそとふ」(②一五六頁)。源氏が麗景殿女御を訪れ昔話をしていた際、ほととぎすが鳴くところ(②一五六頁)。本図と構図が同じであるのは、土佐光則筆「源氏物語画帖」(十七世紀、徳川美術館蔵)と土佐光起筆「源氏物語画帖」(個人蔵、7紅葉賀に掲出)である。『源氏絵詞』(京都大学図書館蔵)⁸にも、「女はう二入、男しやうそく、郭公、月」とあり、女性を二人と指示している。源氏絵では貴女の側に几帳を置くので、顔の見える方が麗景殿女御で、後ろ姿は女房か。本図では「二十日の月」と「近き橋」(②一五六頁)は描くが、源氏の視線の先

にあるはずのほととぎすは見当たらない。

12 須磨。「見るほとそしはしなくさめめくりあはむ月の都ははるかなれとも」(②二〇三頁)。源氏が須磨のわび住まいで、中秋の名月を眺めているところ(②二〇二頁)。よく描かれるのは、源氏が「夕暮れに、海見やらるる廊」(②二〇〇頁)に出て、「舟」や「雁」(②二〇一頁)を見て、従者たちと和歌を詠み合う場面である。しかし本図には舟も雁もなく、代わりに満月が見えるので、八月十五夜に源氏が「見るほどぞ」の和歌を独詠した時のことと推定される。ただし本図に近似する土佐一得筆「源氏物語色紙貼交屏風」(東京国立博物館蔵)は舟・雁を添え、「源氏物語絵貼交屏風」(昭和女子大学図書館蔵)は舟と月、住吉如慶筆「源氏物語画帖」(承応元々寛文三(一六五二一六三)年、サントリー美術館蔵)は月のみを描く。

15 蓬生。「尋ねてもわれこそとはめ道もなくふかきよもきのもとのこゝろを」(②三四八頁)。車内にいる源氏は、「形もななく荒れたる家」の「大きな松に藤の咲きかかりて」香るのに魅かれて外を覗くと、「柳もいたうしだりて、築地もさはらねば乱れ付したり」(②三四四頁)を見て未摘花の邸宅と気づき、家来の惟光に邸内を探らせて「老人」(②三四六頁)から話を聞くところ。そのあと惟光に導かれて源氏が傘を差して邸内に入る場面が、最もよく取り上げられた。本図のように案内を乞

う図で構図も似るのは、伝土佐光信筆「源氏物語画帖」（十六世紀、出光美術館蔵）、土佐派「源氏物語色紙画帖」（十六〜十七世紀、出光美術館蔵）、土佐派「源氏物語色紙絵」（江戸時代初期、京都市芸館蔵。『豪華』所収）と住吉如慶筆「源氏物語手鑑」（個人蔵）（注（3）に同じ）である。

18 松風。「身をかへてひとりかへれる山里にき、しに似たる松風そふく」（②四〇八頁）。源氏が桂に造った別邸「桂殿」に立ち寄ったことを聞きつけて、鷹狩をしていた御曹司たちが「小鳥」を付けた「萩の枝」を土産に参上したところ（②四一八頁）。そのあと「大御酒あまたたび順流れて」（同頁）とあり、本図にも杯を置いた三方が見られる。源氏の居場所は室内か室外かに大別され、さらに屋外の場合は地面に直に座るか畳や敷物を置くか、また源氏の背後に幕が有るか無いかに細別される。いずれの図にも小鳥を付けた萩の枝は描かれるが、鷹を省いた作例もある。本図のように室外で三方があり、鷹と畳・幕がないものは土佐光則筆「源氏物語画帖」（十七世紀、任天堂蔵）のほか、土佐派「源氏物語色紙貼交屏風」（江戸時代前期、和泉市久保惣記念美術館蔵）、「源氏物語絵貼交屏風」（昭和女子大学図書館蔵）と「源氏物語色紙貼付屏風」（十七世紀、斎宮歴史博物館蔵）が挙げられる。

19 薄雲。「入日さすみねにたなひく薄雲は物思ふ袖にいろや

まかへる」（②四四八頁）。源氏が紫の上に暇乞いをして、大堰おおいにいる明石の君を訪れようとした際、数え四歳の明石の姫君が源氏を慕ってきたところ（②四三九頁）。物語には「姫君は、いはけなく御指貫の裾にかかりて慕ひ」（同頁）とあるが、絵では本図のように直衣の裾を掴むように描く方が通例である。この場面は室町時代に制作された「源氏物語扇面散屏風」（浄土寺蔵）をはじめ、よく選ばれた。本図のように紫の上を一段高く置き、女房たちを手前に配置するのは、土佐一得筆「源氏物語色紙貼交屏風」（東京国立博物館蔵）や土佐派「源氏物語色紙画帖」（出光美術館蔵）等に見られる。「紫の上が、御帳台の内から見送るところも含めて、本図（引用者注、土佐派「源氏物語色紙絵」江戸時代初期、堺市博物館蔵）とよく似通った図様の色紙型の作例も多く、おそらく光吉・光則あたりからはじまる一系統と考えられ」（『豪華』）という解説が本図にも当てはまる。ただし本図のは御帳台には見えず、几帳にすり替わったのかもしれない。

49 宿木。「尋たのかきねにほふ花ならば心のま、におりてみましを」（⑤三七九頁）。薫と菘を打って負けた帝は、褒美として庭に咲く菊の花を与え、薫が手折りに行くところ（⑤三七八頁）。画面の右下に薫と菊花、左上に帝と菘盤の組み合わせは夙に、土佐光吉筆「源氏物語手鑑」（一六一二年、和泉市久

保徳記念美術館蔵)に見られる。その解説に、「帝と薫の間に松を配しているが、このように画面の中央に松を配するのは光吉の常套的な構図法」(『豪華』)とあり、本図では松の代わりに別の樹木を置く。そのときの薫の詠作が詞書の和歌で、「垣根に匂ふ花」とあるように菊花を籬垣ませがきに添わせる図が多いが、本図に垣根はない。また物語では薫は「御前の菊」(⑤三七六頁)を採りに清涼殿の階段を下りたが、本図には階段はなく、代わりに白い長方形の物が簀子の下にある。土佐光則筆「源氏物語画帖」(任天堂蔵)、狩野氏信筆「源氏物語図屏風」(個人蔵)、「源氏物語絵貼交屏風」(昭和女子大学図書館蔵)、伝土佐光成筆「源氏物語画帖」(大英博物館蔵)と「源氏小鏡」(石山寺蔵)⁽⁹⁾にも階段はなく、踏み台が地面に置かれているので、本図のも踏み台であろう。

以上により本画帖は土佐派の定型を踏まえつつも、それから外れた描き方が散見される、江戸時代中期の土佐派の作品と見なせよう。従来は末流を軽視していた傾向があるが、新図様が定着すると、それが新たな定型となり一つの流れを形成する。その新式は土佐光吉により整理された時に外されたものが復活した、という可能性も考えられ、土佐家の白描粉本と照合する必然性がある。よって本画帖は土佐家が編み出した画風がどのように継承され享受されたかが分かる、貴重な資料と言えよ

う。近年公開された「源氏物語絵貼交屏風」(昭和女子大学図書館蔵)も江戸中期の土佐派であり、本画帖とも関わりが深く、土佐家を頂点とする土佐派の裾野を考える上で重要である。

三 詞書の本文系統

最後に詞書の和歌の本文について調べる。計十二首のうち、卷名歌は次の六帖である。

3 空蟬、6 末摘花、11 花散里、15 蓬生、18 松風、19 薄雲。

十九世紀に歌川豊国が手掛けた錦絵「源氏絵物語」も、一帖につき絵が一枚で卷名歌も載せている。⁽¹⁰⁾ その本文と比較すると、15 蓬生と18 松風にのみ異同が見られる。15 蓬生の第四句「ふかきよもきの」が錦絵では「ふかきよもぎが」であるが、「の」と「か」(字母「可」)は字形が似ている。18 松風は第三句「山里に」が錦絵では「ふるさとに」である。延宝三(一六七五)年に刊行され流布した北村季吟『湖月抄』は「山里に」であり、『源氏物語大成 校異篇』で調べると河内本は全本が「ふるさとに」であるのに対して、青表紙本はその二種類の本文に分かれる。

次に卷名歌でないのは、次の六帖である。

1 桐壺、2 帚木、7 紅葉賀、8 花宴、12 須磨、49 宿木。

『湖月抄』および『源氏物語大成 校異篇』の底本と本文が違うのは12須磨と49宿木である。12須磨は第二句「しはしなくさめ」が『湖月抄』等では「しはしなくさむ」である。「なくさめ」では解釈しにくく、続く「めぐりあはむ」の「め」に目移りした可能性が考えられる。49宿木は初句が「尋た（字母「堂」）、の」とも読めるが、「ヨの（字母「能」）常の」の誤写と見なせば、『湖月抄』等と同じ「よのつねの」になる。以上により十二首の本文は、江戸時代に流布した青表紙本の系統内に収まると言えよう。

巻名歌でない六帖のうち絵の場面に合うのは2帚木、12須磨、49宿木だけなので、絵の内容に合わせて巻名歌を別の歌に取り替えたとも考えにくい。ちなみに同志社大学所蔵「源語」も一帖ごとに一図に和歌一首を添えた、全五十四帖からなる源氏物語絵巻であり、巻名歌は半数の巻にしかない。⁽¹²⁾「源語」と琵琶湖文化館本の和歌を比べると、一致するのは五帖（3空蝉、8花宴、11花散里、15蓬生、19薄雲）のみである。前掲の錦絵「源氏絵物語」には巻名歌が掲載されていたが、それとは別の基準で和歌が選ばれたのかどうか、今後の課題としたい。

〔付記〕

貴重な資料の掲載を許可してくださいました滋賀県立琵琶湖文化館に深謝いたします。また閲覧・掲載などの手続きには、主任学芸員の和澄浩介氏のお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

本稿は、「知識発見型データベース作成アプリの開発と日本伝統文化の分野横断的研究」（同志社大学人文科学研究所第20期研究会第3研究（二〇一九～二〇二一年度）、および「近世から近代に至る日本伝統文化の分野横断的研究とデータサイエンス教材への活用」（科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号20K1265、二〇二〇～二〇二二年度）における研究の一部であり、また同志社大学宮廷文化研究センターの事業の一環である。

注

- (1) 巻名の前に付けた数字は帖数を示す。たとえば「1桐壺」は第一帖桐壺の巻を表わす。以下、同じ。
- (2) 『実用特選シリーズ 見ながら読む日本のこころ 源氏物語』二六頁、学習研究社、一九八七年一月。その解説に、「この場面は、土佐派の画家を中心に同様の構図でしばしば絵画化された。」とある。
- (3) ビジュアル選書『源氏物語』（新人物往来社、二〇一一年）に全五十四図を収める。注2の著書にも全図を収め、その解説に「恐らく寛永年間（一六二四～四四年）末頃の如慶の真筆と思われ」とある。
- (4) 『秘蔵日本美術大観』五（講談社、一九九三年）に全五十

四図を収める。

- (5) このほか承応三(一六五四)年に刊行された山本春正筆「絵入源氏物語」の図も、立ち姿で紅葉が散っている。当該版本の挿し絵は江戸中期以降の源氏絵図様に大きな影響を与えたが、本画帖との関係性は基本的には認めがたい。

- (6) 久下裕利氏は本屏風について、「江戸時代中期の土佐派の作風を継ぎ、『源氏物語』全五十四帖から原則として各巻一図をもって作成されている。ただ東屋巻に相当する絵が欠落し、代わりに藤袴巻と思われる絵が二図となっている。」(同氏「昭和女子大学図書館蔵『源氏物語絵貼交屏風』—全絵図・場面解説—」(『学苑』九六一号、二〇二〇年一月)と解説された。ただし藤袴の巻と認定された二図のうち一図は東屋の巻で、浮舟の母から届いた手紙を中の君が読んでいるところ(⑥三九頁)とも考えられる。その場面と推定される図は、狩野探幽筆「源氏物語図屏風」(一六四二年、宮内庁三の丸尚蔵館蔵)や「源語」(江戸時代後期、同志社大学蔵)にも見られる。

- (7) 本文は片桐洋一氏・大阪女子大学物語研究会編著『源氏物語絵詞—翻刻と解説—』(大学堂書店、一九八三年一月)による。その解題によると、当写本は十六世紀末に写され、「絵とすべき図様を詳細に記述して呈出したもの」(一三二頁)である。

- (8) 本文は伊井春樹氏編『源氏綱目 付源氏絵詞』(桜楓社、一九八三年五月)による。

- (9) 『石山本「源氏小鏡」』(石山寺、二〇一一年)に全五十四

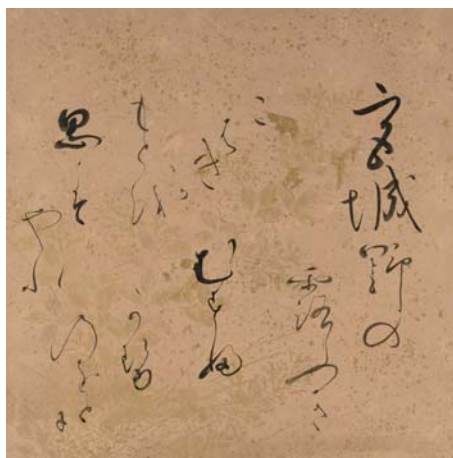
図を収める。解説には「室町時代後期写か」とあるが、詞書の書風はもう少し下りそうである。

- (10) 巻名歌とは源氏物語の各帖から一首ずつ選ばれたもので、撰者も成立年代も不明だが、年代が確定できる古い例は正徳三(一七一三)年版『女源氏教訓鑑』である。詳しくは岩坪健「源氏物語巻名歌の成立に関する一考察—スペンサー本『白描源氏物語絵巻』との関わり—」(同志社大学『文化学年報』七〇、二〇二二年三月)参照。

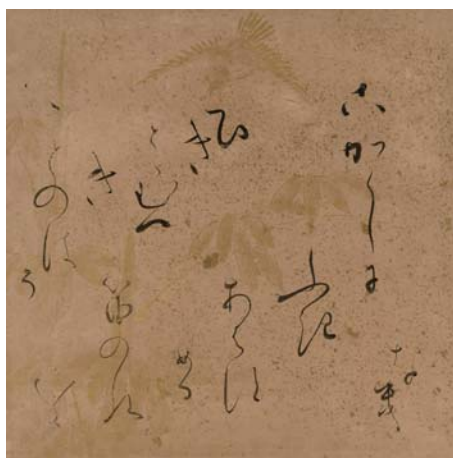
- (11) 岩坪健編『錦絵で楽しむ源氏絵物語』(和泉書院、二〇〇九年)に全五十四図を収める。

- (12) 詳細は岩坪健「同志社大学所蔵『源語』解題」(『同志社国文学』九五、二〇二一年二月)参照。

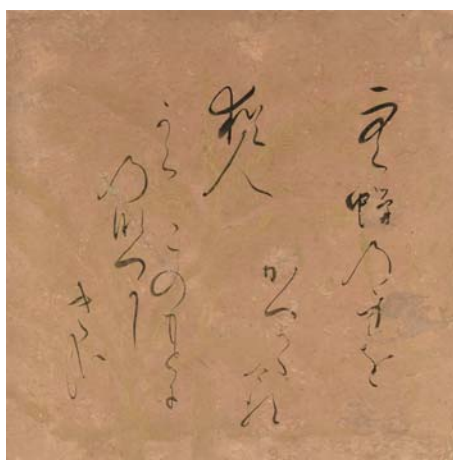
(第20期第3研究会による成果)



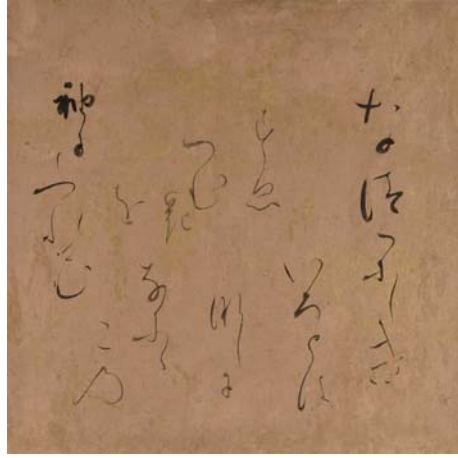
1 桐壺



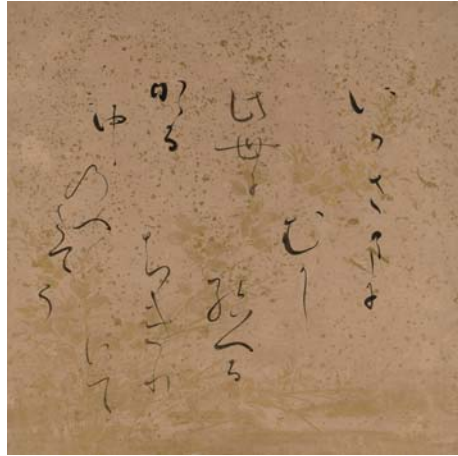
2 帚木



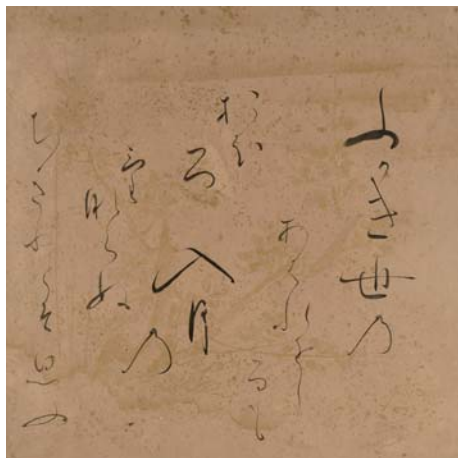
3 空蝉



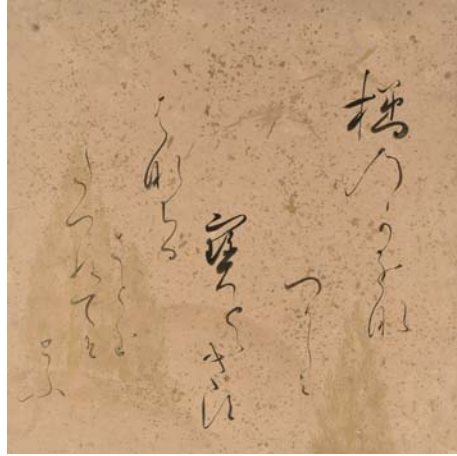
6 末摘花



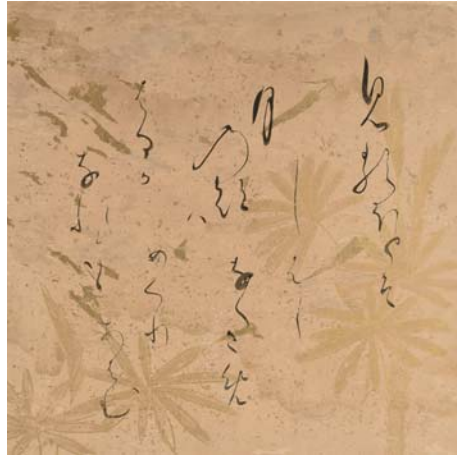
7 紅葉賀



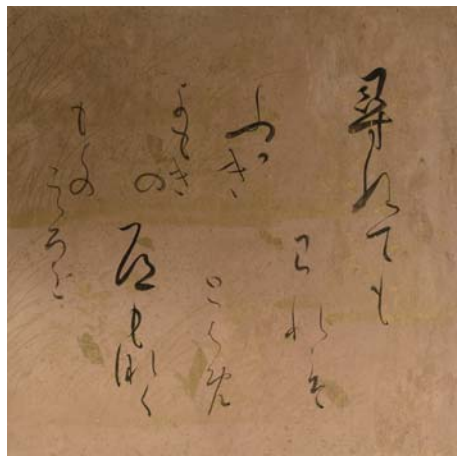
8 花宴



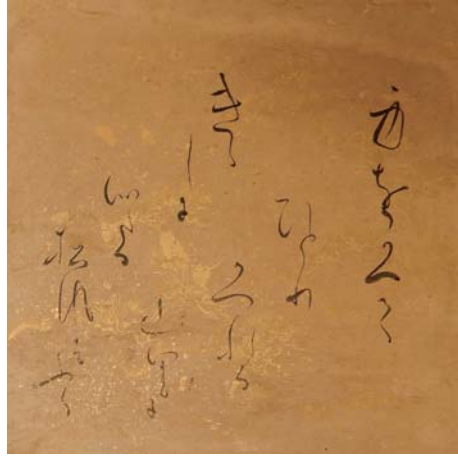
11 花散里



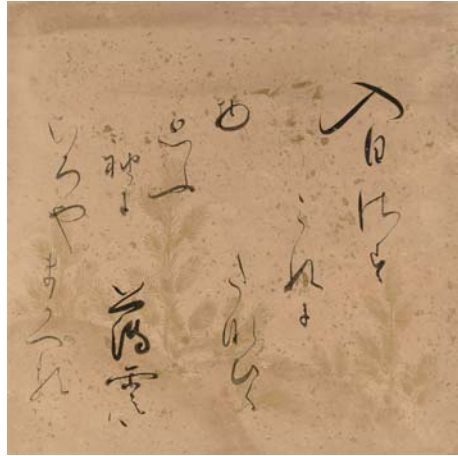
12 須磨



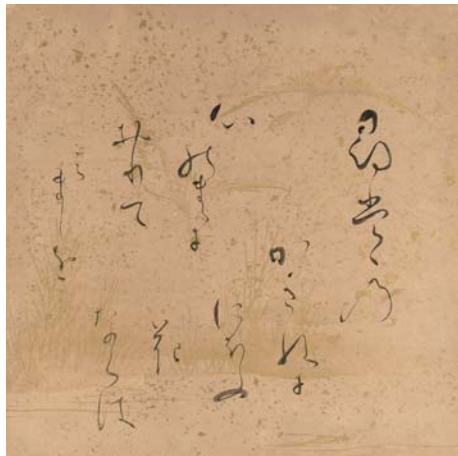
15 蓬生



18 松風



19 薄雲



49 宿木